



KYOTO NATIONAL MUSEUM

January to March, 2014

京都国立博物館だより

1・2・3月号

number

181

contents

【特別展覧会】
南山城の古寺巡礼

左から：重要文化財 十一面観音立像 禅定寺蔵／三十三観音図 原在中筆 酬恩庵（一休寺）蔵／重要文化財 千手観音立像 寿宝寺蔵

右：誕生仏立像 笠置寺蔵



特別展覧会

みなみやましろ

南山城の古寺巡礼



笠置寺の虚空蔵菩薩磨崖仏



山城大橋から南に木津川を望む



笠置山と木津川

古くは「泉河」と称された木津川は、南都奈良と京都をむすぶ水上交通の動脈でした。鈴鹿山脈南の布引山地を源流とし、伊賀盆地から西へ流れ、木津で大きく北へ向きを変えて八幡で淀川と合流します。この木津川流域の山里には、奈良・平安時代以来の法灯を伝える寺院が数多く点在しています。

平安後期の九体阿弥陀堂の残る浄瑠璃寺、木造阿弥陀如来坐像が印象的な岩船寺、弥勒磨崖仏で知られる笠置寺、国宝五重塔のある海住山寺、古仏の収蔵庫である神童寺、銅造釈迦如来坐像で有名な蟹満寺、国宝十一面観音のある観音寺、一休宗純ゆかりの酬恩庵（一休寺）、千手観音像がある寿宝寺、宇治田原の古刹・禅定寺など、京都府内では京都市に次いで国宝・重要文化財を有する地域となっています。

また、飛鳥時代から奈良時代に創建された寺院跡も残されており、今も発掘調査などが進められています。

この展覧会では、各寺院の格別のご配慮のもと、伝来した仏像をはじめ、絵画・書跡・工芸作品といったさまざまな分野の文化財を紹介いたします。さらに、古墳から出土した銅鏡や、寺院跡出土の古瓦類などもあわせて展示し、南山城の歴史と風土をひもときます。奈良的な要素と、京都的な要素が融合した仏教文化の様相をご覧いただき、その魅力に触れる機会となれば幸いです。

次頁より、ご出陳いただく寺院のうち、いくつかを選んでご案内いたします。（m）

【海住山寺】

恭仁宮跡を見おろす山上に建てられたこの寺院は、鎌倉時代初めに興福寺の解脫上人貞慶（一一五五～一二二三）によって再興されました。貞慶は法然と対立したことで知られ、従来の仏教に新しい命を吹き込みました。国宝の五重塔をはじめ文化財の宝庫として名高い寺院ですが、今回の展覧会に際して新たに当館が調査を行いました。新発見の成果を含めての名品の公開に期待下さい。（○）



海住山寺 本堂



青白磁如意頭文香炉・青白磁唐子蓮華唐草文百合口瓶 海住山寺蔵

【禅定寺】

宇治田原町に位置する禅定寺は、十一面観音を本尊とする古刹です。十世紀の末に東大寺の平崇上人によって、藤原摂関家の援助のもとに創建されました。古来よりこの一帯は山岳修行の場として知られており、奈良から近江へと抜ける道も通っていました。本堂の完成は長徳元年（九九五）のことで、現本尊も同時期に造立されました。以来、東大寺と関係が深かった禅定寺ですが、近世に入り月舟和尚によって再興され、曹洞宗となりました。（▲）



【山城国分寺】



みなみ やま し ろ

南山城の古寺巡礼

特別展覧会

平成 26 年 4 月 22 日 (火) ～ 6 月 15 日 (日) 明治古都館 (本館)

【笠置寺】

後醍醐天皇が反鎌倉幕府の兵を挙げた地として、戦前は修学旅行定番の観光地であった笠置寺。もとは奈良時代に遡る山岳信仰の聖地で、巨大な花崗岩に彫られた弥勒如来の磨崖像が本尊です。惜しくも戦火により表面が剥離しその像容はうかがえなくなっていますが、歴世、信仰が捧げられてきた地であり、仏教美術の優品がなお伝わっています。険阻な山上の宝物館からの一時の公開をお見逃しなく。（○）



笠置寺 毘沙門堂

【現光寺】



現光寺 本堂・收藏庫

【岩船寺】



岩船寺 十三重石塔



浄瑠璃寺 三重塔

コラム

南山城と一休宗純

羽田聡

重要文化財 一休宗純像 自賛 酬恩庵（一休寺）蔵



室町幕府に仕えた蜷川親元という人は、途中を欠くものの、寛正六年（一四六五）から文明十七年（一四八五）にかけ、『蜷川親元日記』という日記を残しました。その文明十三年十一月二十一日の記事をみると、「一休和尚、八十八歳、城州新において涅槃す」（原文は漢文）とあり、禅僧・一休宗純（写真1、一三九四～一四八二）が山城新村の酬恩庵にて八十八歳で示寂したことを伝えます。そう、南山城の酬恩庵（通称は一休寺）は、かの一休が晩年を過ごし、臨終をむかえた場所なのです。

「このはし渡るべからず」、あるいは「屏風の虎」などで広く知られた頓知の一休さんの死亡記事にしては何となく味気ない、と意外に思われる人もいるでしょう。それもそのはず、頓知の一休さんは江戸時代以降、爆発的に広まった作り話で、おなじ時代の記録などにはほとんど姿をみせません。わずかに弟子の記した年譜、自身の詩文集『狂雲集』（写真2）や『自戒集』が足跡や考え方を知る重要な証人となっています。

これらによると、一休と南山城との関わりは康正二年（一四五六）、妙勝寺という寺の堂に遠い師にあたる南浦紹明（大応国師）の木像を安置したことにはじ



禅定寺 本堂

【蟹満寺】



阿弥陀如来坐像 蟹満寺蔵



蟹満寺 本堂



山城国分寺 塔跡

【酬恩庵（一休寺）】

日本のみならず、世界的にも有名な禅僧・一休宗純（一二三九四〜一四八二）ゆかりの寺院で、一休寺と通称されています。一休は晩年の多くをここで過ごし、八十八歳で示寂しました。その名称には、遠い師にあたる南浦紹明（大応国師）の「恩」に「酬」いるという意味があります。頂相をはじめ、所用の尺八や沓など、いまなお多くの人に愛される一休にまつわる品々が数多く伝わり、この展覧会でも遺品の大部分が展示されます。（h）



酬恩庵（一休寺）



観音寺 本堂

【観音寺】



寿宝寺

【寿宝寺】

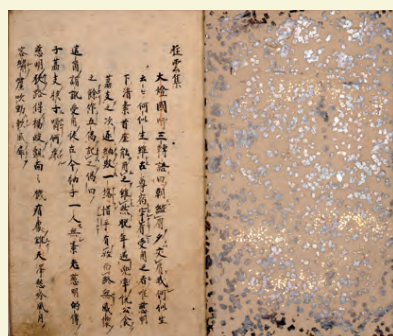


神童寺 本堂

【神童寺】

【浄瑠璃寺】
浄瑠璃寺は、京都と奈良の境界付近、当尾と呼ばれる地にあり、南都興福寺の別所として発達した寺院です。別所とは本寺を離れて閑静な場所ので僧が修行・隠棲するために設けられた寺院で、浄瑠璃寺も幽邃の地にあつて、九体の阿弥陀像が並ぶ本堂及び三重塔と庭園が平安時代の夢幻の空間を今日に伝えています。秘仏の三重塔本尊・薬師如来坐像をはじめ、平安・鎌倉時代の仏教美術の優品を堪能ください。（o）

（執筆者 ※五十音順 a：浅瀨 毅、o：大原嘉豊、h：羽田 聡、m：宮川禎一）



狂雲集 酬恩庵（一休寺）蔵



酬恩庵（一休寺）本堂

まるようです。その傍らに師の「恩」に「酬」いるの意味をこめて酬恩庵を建立し、以後、たびたびここを訪れ、ついには終焉の地となりました。もしかすると、豊かな歴史と風土を育んだ南山城を好んでいたのかもしれない。

こうした関係もあつて、酬恩庵には尺八、直綴や沓など、一休にまつわる遺品が数多くのこされています。とかく一休という、風狂を自認していたためか、私たちは一風変わった行動や言動に目を向けがちでした。しかし、いまに伝わる遺品を見ると、じつに質素で、極限まで自己をみつめ、当時の禅宗と政治の世界に正面から対峙したように思えてなりません。このたびの展覧会「南山城の古寺巡礼」では、等身大の一休宗純に出会えます。

博物館で作品の基本情報を記す際の必須項目に「員数」がある。「員数を揃える」とか、「員数外」といった形で耳にすることもあるにはあるが、日常会話ではあまり耳にしない言葉だろう。「員数」とはつまり「物の数」であり、作品調書では、作品の数を意味する。

日本の美術には、三幅対や六曲一双など、当初から複数が構成することを前提として制作された作品が多くあるので、作品ひとつが複数ということは珍しくない。さらに、掛物ならば「幅」、巻物ならば「巻」、屏風であれば「隻」や「双」など、作品の形状に対応する助数詞が定まっており、数は同じ「一」であっても、さまざまな助数詞との組み合わせが存在する。

きものを中心とする染織品を担当している私が最も多く用いる助数詞は「領」。しかし「領」も万能ではない。漢和辞典を見れば明らかな通り、「領」とは襟、首を意味する漢字であり、首まわりを覆う衣服に用いる言葉だからである。袴や裳など、下半身にまとう衣服に対応する助数詞は「腰」であり、帯など細長い形状のものには「筋」や「条」を用いるのが一般的であろう。

二〇一〇年、袷袢に関する特別展を企画していた私は、袷袢にふさわしい助数詞について考えあぐねていた。それまでの私は、右肩のみを覆う着装法が一般的な袷袢に対して「領」を用いることに違和感があり、当館の作品台帳にもしばしば使用されてい



重要文化財 応夢衣 京都国立博物館蔵

助数詞考

京都国立博物館教育室長 山川 暁 Yamakawa Aki

る「肩」を、無批判に用いていた。ところが、禅宗の袷袢に関する文字資料、具体的には、手紙や宝物目録、箱書などを通覧するにつれ、「肩」という助数詞がまったく見当たらないことに気づいたのである。

たとえば、中国・南宋時代の高僧・無準・師範が、愛弟子である東福寺開山・円爾に贈った袷袢について記す自筆の手紙には、「法衣一頂」と記されている。また正和五年（一二三六）、円爾が示寂してから三十六年後に記された目録では、「法衣一帖」となっている。このほかにも、袷袢の員数を記すにあたって「帖」を助数詞とする文献は相当数にのぼり、中世の禅宗社会では、この助数詞はかなり一般的であったとおぼしい。

ところが、中世から古代に目を転じた時、状況は一変した。光明皇后が東大寺大仏に寄進する聖武天皇遺愛品を書き上げた目録「国家珍宝帳」の冒頭に記される袷袢は「領」、空海が留学先の唐からもたらした品を記す「御請来目録」においても、師である恵果から授けられた袷袢は「領」と表記されていたのである。

こうして現在、袷袢にふさわしい助数詞として、私は最もなじみ深い「領」を用いている。漢字一文字のことではあるが、現代人にも分かりやすく、歴史的背景にも寄り添って選んだこの助数詞には、ささやかな思い入れを持っている。

平成知新館の開館日が決定しました！

京都国立博物館の新しい顔、「平成知新館」の開館日が平成26年9月13日（土）に決定しました。

平成知新館は、東京国立博物館法隆寺館、ニューヨーク近代美術館新館を手がけた建築家・谷口吉生氏の設計。直線を基本に京の町屋のコンセプトを取り入れた展示空間では、収蔵品を中心に京文化の神髄をゆつくり楽しんでいただけです。また、開放的なエントランスホールに降りそそぐ陽光は訪れる方々をやさしく包んでくれることでしょう。さらに、展示室全体を守る免震構造、最新の映像設備を誇る講堂、庭を眺望できるレストランなど、京博の新しい魅力が満載です。あとしばらくお待ちいただくことになりましたが、オープン記念展示では、収蔵の名品の数々をご覧に入れるべく、準備中です。どうぞご期待ください。



撮影：北嶋俊治

* 国立博物館の展覧会 *

- ◆ 東京国立博物館 ◆
特別展「クリフランド美術館展―名画でたどる日本の美―」
平成26年1月15日（水）～2月23日（日）
- 特別展「人間国宝展―生み出された美、伝えゆくわざ―」
平成26年1月15日（水）～2月23日（日）
- 開山・栄西禅師800年遠忌 特別展「栄西と建仁寺」
平成26年3月25日（火）～5月18日（日）
- ◆ 奈良国立博物館 ◆
特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」
12月7日（土）～平成26年1月19日（日）
- 特別陳列「お水取り」
平成26年2月8日（土）～3月16日（日）
- ◆ 九州国立博物館 ◆
特別展「御三家筆頭 尾張徳川家の至宝」
平成26年1月15日（水）～3月9日（日）

休館のお知らせ

京都国立博物館は、平成知新館 開館までの間、平常展示を休止し、展覧会期間中のみ開館しております。
平成 26 年の全館休館は次の通りです。

平成 25 年 12 月 16 日～平成 26 年 4 月 21 日 6 月 16 日～9 月 12 日

また、作業車両等通行のため、安全上の観点から、大和大路側の西門（正門）を閉鎖しております。
開館までの間、ご不便、ご迷惑をお掛けいたしますが、ご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

Announcements 【講座・イベント】

《京都国立博物館 特別シンポジウム》

「京博が新しくなります」

日 時：1 月 25 日（土）午後 12 時 30 分～4 時

会 場：京都テルサホール（京都市南区東九条下殿田町 70）

聴講料：無料

プログラム：

「京博の過去・現在・未来」 佐々木丞平（館長）

「国宝絵巻の時空に遊ぶ」 鬼原俊枝（列品管理室長）

「京都から世界へ—黄金と漆の宝箱—」 永島明子（主任研究員）

「東アジア染織の宝蔵・日本」 山川 暁（教育室長）

「美を伝えるために—文化財修理の世界—」 村上 隆（学芸部長）

特別対談「新しい京博とともに」

井浦 新（俳優・京都国立博物館文化大使）× 佐々木丞平

コーディネーター：村上 隆

申し込み先：インターネットにて下記お申し込みフォームよりお手続きください。

<http://www.kuba.co.jp/kyohaku201301/>

《京都・らくご博物館 春》

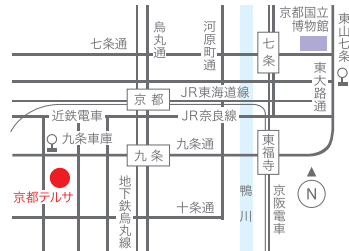
日 時：平成 26 年 5 月 16 日（金）午後 6 時 30 分 開演

会 場：平成知新館 講堂

※ チケットご希望の方はお電話、または WEB よりお申し込みください（平成 26 年 3 月 4 日（火）より販売予定）。

申し込み先：お電話／博物館事業推進係 075-531-7504（月～金の 10～12 時・13～17 時に受付 ※祝日は除く）

WEB／<http://www.kyohaku.go.jp> らくご博物館【春】申し込み画面



Forthcoming Exhibitions

【これからの展覧会】

◆特別展覧会 南山城の古寺巡礼 平成 26 年 4 月 22 日（火）～6 月 15 日（日）

◆特別展覧会 修理完成記念 国宝 鳥獣戯画と高山寺 平成 26 年 10 月 7 日（火）～11 月 24 日（月・祝）

Information

開館時間：展覧会期間中

9:30～18:00、金曜日は 20:00 まで開館

* 入館は閉館の 30 分前まで

観覧料：展覧会ごとに異なります

休館日：月曜日（ただし月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館）
12 月 16 日～平成 26 年 4 月 21 日まで全館休館です

アクセス：JR＝京都駅下車、市バス D1 のりばから 100 号、D2 のりばから 206・208 号系統にて博物館・三十三間堂下車、徒歩すぐ
プリンセスラインバス京都駅八条口のりばから京都女子大学前行にて東山七条下車、徒歩 1 分

近鉄電車＝丹波橋駅下車、京阪電車丹波橋駅から出町柳方面行きにて七条駅下車、東へ徒歩 7 分

京阪電車＝七条駅下車、東へ徒歩 7 分

阪急電車＝河原町駅下車、京阪電車祇園四条駅から大阪方面行きにて七条駅下車、東へ徒歩 7 分

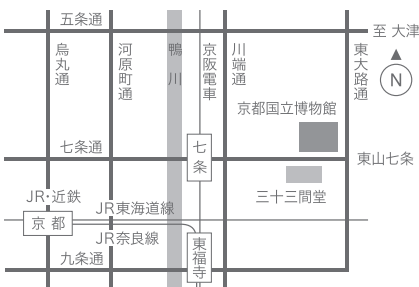
駐車場は有料となっております。ご来館の際は、なるべく公共交通機関ご利用ください。

〒605-0931 京都市東山区茶屋町 527

TEL.075-525-2473（テレホンサービス）

ホームページ <http://www.kyohaku.go.jp>

携帯サイト <http://www.kyohaku.go.jp/i>



発行日 2014 年 1 月 1 日／編集・発行 京都国立博物館
デザイン 谷なつ子／印刷 株式会社 大伸社

「博物館だより」を郵送ご希望の方は、返信用封筒（角 2 封筒は 120 円、長 3 封筒は 90 円切手貼付、宛名明記）を同封して、当館企画室にお申し込みください。